

楚辞「九懷」訳注（上）

著者	上原 尉暢
雑誌名	東北大学中国語学文学論集
巻	27
ページ	53-86
発行年	2022-12-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/00137199

楚辞「九懷」訳注(上)

上原 尉暢
漢代楚辞作品研究会

はじめに

小稿は、科学研究費補助金基盤研究(C)(一般)18K00348「漢代楚辞作品の多角的研究——文学・思想・文化研究資料としての再評価をめざして」における研究成果の一部である。該研究の現時点でのスタッフは、上原尉暢、狩野雄、塚本信也、矢田尚子の4名である。該研究会発足の目的については、「矢田尚子「楚辞「惜誓」訳注」(『東北大学中国語学文学論集』第26号、2021年12月)51～52頁を参照されたい。

小稿には、王褒「九懷」の「匡機」・「通路」・「危俊」・「昭世」の訳注を収めている。該訳注は上原が担当したが、その原稿は上記スタッフによる検討を経たものである。今回に続く残りの「九懷」作品の訳注も、同様の手法により発表される予定である。

なお、小稿を作成する過程で得られた知見の一部を発表したものととして、上原「宮廷文学としての王褒「九懷」」(『東北大学中国語学文学論集』第26号、2021年12月)がある。併せて参照していただければ幸甚である。

訳注についての凡例を、以下に掲げる。

凡例

○底本には洪興祖撰、白化文等点校『楚辞補注』(中華書局、2002年)を用い、四部叢刊本『楚辞補注』及び明万曆一四年馮紹祖校刊本王逸『楚辞章句』(台北・藝文印書館、1974年)を参照した。校訂を施したものについては「(→○○)」として掲げる。注釈内の引用については、経書は『十三経注疏附校勘記』(台北・藝文印書館影印本、1965年)に、正史は中華書局排印本に、『説文解字』は段玉裁『説文解字注』(漢京事業有限公司影印本、1980年)に、『莊子』は郭慶藩撰、王孝魚点校『莊子

集積』（中華書局、1961年）に『韓非子』は王先慎撰、鍾哲点校『韓非子集解』（中華書局、1998年）に、『管子』は黎翔鳳撰、梁運華整理『管子校注』（中華書局、2004年）に、『淮南子』は劉文典撰、馮逸・喬華点校『淮南鴻烈集解』（中華書局、1989年）に、『戦国策』は上海古籍出版社排印本（1985年）に、『晏子春秋』は吳則虞撰『晏子春秋集積』（中華書局、1982年）に、『説苑』は向宗魯校証『説苑校証』（中華書局、1987年）に、『文選』は、李善注本は尤袤本（台北・石門図書有限公司、1976年）に、五臣注本は『足利学校蔵宋刊明州本六臣注文選』（人民文学出版社、2008年）に、『玉台新詠』は吳兆宜注、程琰刪補、穆克宏点校『玉台新詠箋注』（中華書局、1985年）に、『樂府詩集』は中華書局排印本（1979年）に、『藝文類聚』は汪紹楹校『藝文類聚』（上海古籍出版社、1982年）に依拠した。

○解釈に際して『楚辞補注』（以下『補注』と略記）以外に頻繁に参照したのものとしては、聞一多『楚辞校補』（『聞一多全集』5、湖北人民出版社、1993年。以下『校補』と略記）、David Hawkes《Ch'u Tz'u : the Songs of the South : an Ancient Chinese Anthology》（Clarendon Press、1959年。以下《Ch'u Tz'u》と略記）、傅錫壬『新訳楚辞読本』（三民書局、1976年。以下『読本』と略記）、梅桐生『楚辞今訳』（貴州人民出版社、2000年。以下『今訳』と略記）、湯炳正・李大明・李誠・熊良智『楚辞今注』（上海古籍出版社、1996年。以下『今注』と略記）などがある。

○押韻は羅常培・周祖謨『漢魏晉南北朝韻部演變研究』第一分冊（科学出版社、1958年）所収の「兩漢詩文韻譜」に基づいた。双声・疊韻語については王力主編『王力古漢語字典』（中華書局、2000年）を参照した。

○作品本文とその書き下し文は太字で示して句ごとに番号を振り、現代日本語訳と注釈を付けた。なお、紙幅に限りがあるため、解題は日本語訳のみ、王逸注は訓読のみとした。

解題

「九懷」者、諫議大夫王褒之所作也。懷者、思也。言屈原雖見放逐、猶思念其君、憂國傾危而不能忘也。褒讀屈原之文、嘉其溫雅、藻采敷衍。執握金玉、委之汚瀆、遭世溷濁、莫之能識。追而愍之、故作「九懷」、以裨其詞。史官錄第、遂列于篇。

通釈 「九懷」は、諫議大夫王褒が作ったものである。「懷」とは、「思う」ことである。屈原が放逐されながらも、その君主を思念し、国が傾き危うくなるのを憂慮して忘れることができないこ

とをいうのである。王褒は屈原の文章を読み、そのおだやか且つみやびやかであり、彩り鮮やかな言葉が連ねられているのを賛美した。（しかし屈原は）金玉のような才能を身に着けながら、きたないどぶに棄てられ、世の混乱に遭遇し、その存在をよく知るものがいなくなっていた。（王褒は）その事を追慕して憂い傷み、「九懷」を作って、その言葉を補った。史官がそれらを書き留め順序付け、かくて楚辞作品の列に並ぶこととなった。

諫議大夫王褒 『補注』に「褒、字子淵、蜀人也。爲諫大夫。」とある。王褒については、『漢書』六四下王褒伝に「王褒、字子淵、蜀人也。……神爵、五鳳之間、天下殷富、數有嘉應。上頗作歌詩、欲興協律之事、丞相魏相奏言知音善鼓雅琴者渤海趙定、梁國龔德、皆召見待詔。於是益州刺史王褒欲宣風化於衆庶、聞王褒有俊材、請與相見、使褒作中和、樂職、宣布詩、選好事者令依鹿鳴之聲習而歌之。……褒既爲刺史作頌、又作其傳、益州刺史因奏褒有軼材。上乃徵褒。……頃之、擢褒爲諫大夫。」とある。「諫議大夫」とは、天子の過誤や国家の利害などについて諫言を行うことを任務とする官名。秦代に「諫議大夫」「諫大夫」等の官称があったが、漢の武帝の元狩五年（前118年）に正式に「諫大夫」が置かれた（『漢書』百官公卿表上・郎中令）。後漢の光武帝期に「諫議大夫」に改称された（『後漢書』百官志・諫議大夫）。

懷者、思也 『爾雅』釋詁に「懷……、思也」とあり、『方言』卷一に「懷……、思也」とある。

『説文解字』卷十・心部では、「懷、念思也」とあり、「段注」は「念思者、不忘之也」とする。

史官録第…… この経緯については、王逸「九思」序にも「（王逸）博雅多覽、讀『楚辭』而傷愍屈原、故爲之作解。又以自屈原終沒之後、忠臣介士遊覽學者讀「離騷」・「九章」之文、莫不愴然、心爲悲感、高其節行、妙其麗雅。至劉向、王褒之徒、咸嘉其義、作賦聘辭、以讚其志。則皆列於譜錄、世世相傳。」とある。

「匡機」

題解 「危機を匡正する」の意となるだろうが、その含意するところは明確にはしがたい。《Ch'u Tz'u》は“Freedom from Worldly Contrivings（世俗的謀略からの自由）”、『今訳』は「匡機、大概は匡救君國的危機之意」とし、『今注』は『説苑』政理篇の「修近理内、政概機之禮（近きを修め内を理め、概機の礼を政す）」と同じく、身内や家族を正しく治めるの意、とするが、いずれの解

積にせよ、天上遊行を描くことが中心となる作品本文とは大いに径庭がある。題と本文とが乖離しているこうした傾向は、この作品のみならず、「九懷」全作品に言えることである。内容は、不遇を託つ主人公が天上世界に遊び、天宮の建物や瑞獣などを十分に楽しむが、結局は主君のことを忘れられず心を痛める、というものである。

1 極運兮不中 極^{めぐ}運るも 中^{あた}らず

王逸注 周轉求君、道不合也。（周轉して君を求むるも、道合わず。）

2 來將屈兮困窮 來將し屈して困窮す

王逸注 還就農桑、修播植也。（還りて農桑に就きて、播植を修むるなり。）

通釈 太極は経巡るも、その流れに合うことなく、戻って来て身をかがめ、困窮生活を送る。

極運 この語が指し示すところもよく分からない。黄靈庚『楚辭異文辯證』（中州古籍出版社、2000年）は、「極者、太極也。運者、行也」とし、「極運」とは、『漢書』卷二一上「律歴志上」の「太極運三辰五星於上」、すなわち、宇宙を構成する陰陽二元気の根本である太極が三辰・五星の上をめぐること、だとする。いましばらくこの説に従い、時勢がゆくりなく進展することをいう表現として解釈する。

不中 楚辭「七諫」哀命の「哀時命之不合、傷楚國之多憂」、「九歎」遠逝の「惜往事之不合、橫汨羅而下瀉」の「不合」と同じく、時勢や時運に合わない、ことを言うのであろう。

來將 「來」字について『校補』は意味が通らないので、『補注』の「來、……一作永」という指摘に拠って、「永」字に改めるべきだという。とはいえ王逸注に依拠して「還り來たる」の意で解釈しても不自然ではないであろう。ここでは底本に従う。

3 余深愍兮慘怛 余れ深く愍みて慘怛たり

王逸注 我内憤傷、心切剝也。（我内に憤傷し、心切剥す。）

4 願一列兮無從 一たび列べんと願うも從る無し

王逸注 欲陳忠謀、道隔塞也。（忠謀を陳べんと欲するも、道隔てられ塞がるるなり。）

通釈 私はひどく憂いて悲しみにくれる、良策を君前に並べたいのだがその手立てもないのだ。

愍 憂愁すること。楚辭「九章」惜誦に「惜誦以致愍兮、發憤以抒情」、「九章」懷沙に「鬱結紆軫兮、離愍而長鞠」など、楚辭作品に頻見する語。

慘怛 悲嘆にくれるさま。『莊子』盜跖篇に「慘怛之疾、恬愉之安、不監於體」、楚辭「哀時命」

に「邪氣襲余之形體兮、疾憊怛而萌生」、『史記』卷八四・屈原列伝に「疾痛慘怛、未嘗不呼父母也」とある。

5 乘日月兮上征 日月に乗りて上に征き

王逸注 想託神明、陞天庭也。（神明に託して、天庭に陞らんと想うなり。）

6 顧遊心兮鄙鄴 顧みて心を鄙鄴に遊ばせんとす

王逸注 回眄周京、念先聖也。文王都鄴、武王都鄙、二聖有德、明於用賢。故顧其都、冀遭逢也。

（周京を回眄し、先聖を念うなり。文王 鄴に都し、武王 鄙に都す、二聖は徳有りて、賢を用うるに明かるし。故に其の都を顧みて、遭逢せんことを冀うなり。）

通釈 そこで日月に乗って天に登り行き、振り返って古の聖王が治めた鄙鄴に心を遊ばせた。

乗日月 太陽神や月神が手綱を握る車に乗る。黄靈庚『楚辞章句疏證（増訂本）』（上海古籍出版社、2018年。以下『疏證』と略記する。）は、「離騷」の「吾令羲和弭節兮〔王逸注：羲和、日御也。〕」や「前望舒使先驅兮〔王逸注：望舒、月御也。〕」を踏まえた表現だと指摘する。

上征 天上遊行に出発すること。楚辞「離騷」に「馳玉虬以乘鸞兮、溘埃風余上征」、また「載營魄而登霞兮、掩浮雲而上征」、さらに楚辞「九懷」昭世にも「馳六蛟兮上征、竦余駕兮入冥」とある。

鄙鄴 鄙は周の武王の都、現在の陝西省西安南西部。鄴は周の文王の都、今の陝西省戸県東部。

顧 王逸注に「回眄」とあるように、振り返りみる、の意。楚辞「九章」哀郢に「過夏首而西浮兮、顧龍門而不見」とある。

遊心 心を対象に遊ばせる。元来道家的語彙であり、『莊子』に頻繁に見られる。例えば『莊子』人間世篇に「且夫乗物以遊心、託不得已以養中、至矣」とある。

7 彌覽兮九隅 弥く九隅を覽て

王逸注 歴觀九州、求英俊也。（九州を歴觀し、英俊を求むるなり。）

8 彷徨兮蘭宮 蘭宮を彷徨す

王逸注 遊戲道室、誦五經也。（道室を遊戲し、五經を誦するなり。）

通釈 天の隅々まで見尽くして、蘭の薫る宮殿にさまよい出る。

押韻 冬（中・窮・宮）東（從・鄴）合韻。

九隅 王逸注は「九州」と釈するが、楚辞「天問」に「九天之際、安放安屬、隅隈多有、誰知其數」や『淮南子』天文訓に「天有九野、九千九百九十九隅」とあることより、天の隅々という意味

で解する。

蘭宮 蘭の香る宮殿。宋玉「風賦」（『文選』巻十三）に「楚襄王遊於蘭臺之宮、宋玉・景差侍」、李周翰注に「蘭臺、臺名」に基づく表現であろう。張協「七命」（『文選』巻三五）にも「蘭宮秘宇、彫堂綺櫳」とある。こうした香草+建物名からなる熟語は、以下にも「芷閭」「葯房」「菌閣」「蕙樓」などがあり、この類いのことばを連ねることで、この天上空間が高潔かつ清浄なる場であることを示そうとする。その修辭的発想は以下にも示す通り、「九歌」作品に基づくものである。

彷徨 さまよい歩くこと。『莊子』逍遙遊篇に「彷徨乎無為其側、逍遙乎寢臥其下」、「九歎」憂苦に「外彷徨而游覽兮、内側隱而含哀」。

9 芷閭兮葯房 **芷閭と葯房と**

王逸注 居仁履義、守忠貞也。（仁に居り義を履み、忠貞を守るなり。）

10 奮搖兮衆芳 **衆芳を奮搖す**

王逸注 動作應禮、行馨香也。（動作は礼に応じ、行いは馨香あるなり。）

通釈 芷の門と葯の部屋とには、あまたの香りがふりまかれてる。

芷閭 「芷」はセリ科の多年草の香草。ヨロイグサ、またはハナウド。楚辞作品では頻繁に用いられる。一例として「九歌」湘夫人に「芷葺兮荷屋、繚之兮杜衡」とある。「閭」は路地の表門。

「九章」哀郢に「發郢都而去閭兮、荒忽其焉極」とある。

葯房 ヨロイグサの葉からなる部屋。「九歌」湘夫人に「築室兮水中、葺之兮荷蓋。蓀壁兮紫壇、播芳椒兮成堂。桂棟兮蘭橈、辛夷楣兮葯房」とある。

衆芳 多くの香り。楚辞「離騷」に「昔三后之純粹兮、固衆芳之所在」、「九弁」に「以爲君獨服此蕙兮、羌無以異於衆芳」とある。

11 菌閣兮蕙樓 **菌閣と蕙樓と**

王逸注 節度彌高、徳成就也。（節度^{いよ}弥いよ、徳成就するなり。）

12 觀道兮從橫 **觀道 從横す**

王逸注 衆人瞻望聞功名也。（衆人瞻望し、功名を聞くなり。）

通釈 香草に満たされた楼閣が連なり、楼閣の居並ぶ通りは縦横に連なっている。

菌閣・蕙樓 「菌」は楚辞作品では「離騷」に「雜申椒與菌桂兮」とあるように、「桂」と併用される香木の類。「蕙」も同様に楚辞作品に頻出する香草。「九歌」湘夫人に「罔薜荔兮爲帷、擗蕙

櫂兮既張」。この「擗蕙櫂」は蕙を割いて並べたひきし廂のこと。「菌閣」・「蕙樓」は香木や香草からなる美しい楼閣をいう。南齊・謝朓「游東田」（『文選』卷二二）に「尋雲陟累榭、隨山望菌閣」、南齊・王融「謝武陵王賜弓啓」（『藝文類聚』卷六十・軍器部・箭）に「殿下摘藻蕙樓、暢蕝蘭苑」とある。

觀道 「觀」も楼閣のこと。楚辭「大招」に「觀絶霽只」、王逸注に「觀、猶樓也」とある。「觀道」は楼閣の居並ぶ通りをいうのだろう。

從横 「從」は「縦」に同じ。楚辭「七諫」沉江に「不開寤而難道兮、不別横之與縦」とある。ここでは道路が縦横に交錯することをいう。

13 寶金兮委積 寶金 委積し

王逸注 志意堅固、策謀明也。（志意堅固にして、策謀明らかなり。）

14 美玉兮盈堂 美玉 堂に盈つ

王逸注 懿譽光明、滿朝廷也。（懿譽はかがや光き明らかにして、朝廷に満つるなり。）

通釈 宝石や黄金が積み上がり、美玉が広間に満ちている。

委積 つもること。楚辭「九章」懷沙に「材樸委積兮、莫知余之所有」。

盈堂 広間に満たされる。後漢・崔琦「七蠲」（『藝文類聚』卷五七・七）に「紅顔溢坐、美目盈堂」とある。

15 桂水兮潺湲 桂水 潺湲として

王逸注 芳流衍溢、周四境也。（芳流衍溢として、四境を周るなり。）

16 揚流兮洋洋 流れを揚ぐること 洋洋たり

王逸注 潔白之化、動百姓也。（潔白の化、百姓を動かすなり。）

通釈 肉桂がわきに植わっている川はさらさらと流れ、盛大なる波を揚げている。

桂水 肉桂が川端に生える川。「芷閭」などと同様に、「香木+名詞」の作りからなる語、と解釈できよう。

潺湲 水が豊かに流れるさま。楚辭「九歌」湘夫人に「慌忽兮遠望、觀流水兮潺湲」、また「招魂」に「川谷徑復、流潺湲些」とある。

洋洋 水が盛んに流れるさま。『詩經』衛風「碩人」に「河水洋洋、北流活活」、毛伝に「洋洋、盛大也」とある。楚辭作品にもこの言葉は多用されるが、流水を形容する例は他に見られない。

17 著蔡兮踊躍 著蔡 踊躍し

王逸注 著龜喜樂、慕清高也。著、筮也。蔡、大龜也。『論語』曰、臧文仲居蔡。（著龜は樂を好み、清高を慕うなり。著とは、筮なり。蔡とは、大龜也。『論語』[公治長篇]に曰く、臧文仲蔡に居る、と。）

18 孔鶴兮回翔 孔鶴 回翔す

王逸注 畏怖羅網、陞青雲也。（羅網を畏怖し、青雲に陞るなり。）

通釈 長寿の大きな神亀は飛び上がり、孔雀や鶴は飛翔する

著蔡 王逸注は、「著」は「筮」、すなわちト占に用いるめどきであり、「蔡」は大龜を指すとす。『補注』は、後漢・張衡「西京賦」（『文選』巻二。以下同）の「搏者龜[薛綜注：耆、老也。龜之老者神]」などを根拠に、「著」は「耆」とすべきであり、「著蔡」は長寿の神亀の意とする。後漢・馬融「広成頌」（『後漢書』列伝巻五十・馬融伝）にも「淫魚出、著蔡浮」と、この語が「淫魚」に対応する熟語として用いられていることから妥当な解釈と言えよう。『校補』もこの『補注』の解釈を支持する。天上空間を彩る瑞獣として用いているのであろう。

踊躍 飛び上がり、跳ねまわること。『莊子』大宗師篇に「今之大冶鑄金、金踊躍曰、『我且必爲鏐鏐』」、司馬相如「大人賦」（『漢書』巻五七下・司馬相如伝下）に「蔑蒙踊躍（『史記』巻一一七・司馬相如列伝では「蔑蒙踴躍」に作る）、騰而狂趨」とある。

孔鶴 孔雀と鶴。『補注』は「鶴」字について「一作鵠」と指摘し、また『楚辭異文辯證』は梁・沈約「詠湖中雁」詩（『文選』巻三〇）の李善注が引く該文の異文では「孔雀」に作るとする。「孔雀」であれば楚辭「大招」に「孔雀盈園、畜鸞皇只」とある。いずれにせよ、前出の「著蔡」と同じく瑞獣や瑞禽として用いているのであろう。

回翔 「迴翔」に同じ。旋回して飛翔すること。楚辭「九歌」大司命に「君迴翔兮以下、踰空桑兮從女」、また「九懷」昭世に「乘龍兮偃蹇、高迴翔兮上臻」。

19 撫檻兮遠望 檻を撫して遠く望み

王逸注 登樓伏楯、觀楚郢也。（樓に登りて楯に伏し、楚郢を觀るなり。）

20 念君兮不忘 君を念いて忘れず

王逸注 思慕懷王、結中情也。（懷王を思慕して、中情を結ぶなり。）

通釈 檻を撫でながら遠くを望み、主君のことを思って忘れることができない。

撫檻 欄干に手を置く。楚辭「招魂」「坐堂伏檻、臨曲池些。」の「伏檻」と同じく、欄干越しに視線を遠く馳せる仕草を示す。

遠望 遠くへ視線を馳せること。楚辞「九歌」湘夫人に「荒忽兮遠望、觀流水兮潺湲」、「九章」悲回風に「登大墳以遠望兮、聊以舒吾憂心」とあるなど楚辞作品に頻見する語である。

不忘 古の君子や賢者を常に意識し続けることをいう。『詩経』小雅「鼓鍾」に「淑人君子、懷允不忘」、楚辞「九章」悲回風に「夫何彭咸之造思兮、暨志介而不忘」。またこの聯の表現については、前漢鏡銘辞にも類似する表現が見られる。「常與君、相謹幸。毋相忘、莫遠望」（「中国古鏡の研究」班「前漢鏡銘集釋」〔『東方学報 京都』第八四冊、2009年〕所引作品番号 219）。この点については、三沢玲爾「楚辞と漢鏡銘」（『神戸国際大学紀要』46号、1994年、46）も併せて参照されたい。

21 佛鬱兮莫陳 佛鬱として陳ぶる莫く

王逸注 忠言蘊積、不列聽也。（忠言蘊積するも、列聽せられざるなり。）

22 永懷兮内傷 永く懷いて内に傷む

王逸注 長思切切、中心痛也。（長思切切として、中心痛むなり。）

通釈 思いは胸に鬱積するものの声に出して伝えられず、長いこと懷いたまま心を痛める。

押韻 陽部平声（房・芳・横・堂・陽・翔・忘・傷）。

佛鬱 心に鬱積するものがあること。楚辞「七諫」沈江に「不顧地以貪名兮、心佛鬱而内傷」、「九懷」思忠に「寤闢標兮永思、心佛鬱兮内傷」、「九歎」惜賢に「覽屈氏之離騷兮、心哀哀而佛鬱」、同歎辞に「憂心展轉愁佛鬱兮、冤結未舒長隱忿兮」、そして「九思」憫上に「思佛鬱兮肝切割、忿悁悁兮孰訴告」とあり、漢代楚辞作品に頻見される。

莫陳 心の内を伝える手立てをもたない、ことをいう。

永懷 長く思い懐くこと。『詩経』周南「卷耳」に「我姑酌彼金盃、維以不永懷」、小雅・祈父之什・正月に「終其永懷、又窘陰雨」、大雅・湯之什・烝民に「仲山甫永懷、以慰其心」。

内傷 心で悲しみ傷つくこと。楚辞「九章」悲回風に「悲回風之搖蕙兮、心冤結而内傷」、「七諫」沈江に「不顧地以貪名兮、心佛鬱而内傷」、「九懷」思忠に「寤闢標兮永思、心佛鬱兮内傷」とある。

「通路」

題解 「道を通じる」、もしくは「通り道」。いずれにしても作品本文との題とのつながりが明確でないことは「匡機」と同様である。この作品も天上遊行表現が中心となる。内容は、賢者が世に入れられない、正当的価値観が転倒する地上に見切りをつけ、主人公は天上へと飛翔する。伝説の

土地を巡るなどさまざまな経験をjするが、結局先行きがみえず、独り思わzらう、というものの。

1 天門兮鑿戸 天門と地戸と

王逸注 金闈玉闈、君之舍也。(金闈玉闈は、君の舍なり。)

2 孰由兮賢者 孰れより賢者を由らしむるや

王逸注 誰當涉履英俊路也。(誰か當に英俊の路を涉履すべからんや。)

通釈 天上の門と地下の戸と、どちらから賢者を招き入れようというのか。

天門 神々が出遊する天上の門。楚辞「九歌」大司命に「廣開兮天門、紛吾乘兮玄雲」、「郊祀歌」十九章(『漢書』卷二二・礼楽志)其十一「天門」に、「天門開、誅蕩蕩」とある。

鑿戸 「鑿」は「地」の古字。「鑿戸」は「天門」と対照的に地上にあるとされる門戸をいう。

『河図括地象』(『周礼』地官・大司徒「日至之景、尺有五寸、謂之地中」正義所引)に「天不足西北、地不足東南。西北爲天門、東南爲地戸。天門無上、地戸無下」とある。この「地戸」の概念が、天地陰陽の氣の循環・相互作用を論じる漢代の自然学の中で生まれたことについては、松村巧「天門地戸考」(吉川忠夫編『中国古道教史研究』[同朋社出版、一九九二年])を参照。

孰由兮賢者 王逸注に従って、天門、地戸のいずれからも賢者を招き入れることができない、の意で解する。

3 無正兮溷廁 無正なるもの溷廁し

王逸注 邪佞雜亂、來並居也。(邪佞雜亂し、來たりて並び居るなり。)

4 懷德兮何覩 徳を懷くもの何こに覩ん

王逸注 忠信之士、不見用也。(忠信の士、用いられざるなり。)

通釈 邪佞な輩で混雑し(混亂を正すものは無く)、有徳者をどこで目にすることがあろうか。

無正 王逸注に拠れば邪佞なる輩をいう。あるいは公正な判断を下すものがないこと。楚辞「哀時命」に「懷瑤象而佩瓊兮、願陳列而無正」。

溷廁 混雑しごった返すこと。

懷徳 道德心を懷く賢人君子的存在。『論語』里仁篇に「君子懷徳、小人懷土」、楚辞「九弁」に「鳥獸猶知懷徳兮、何云賢士之不處」。

5 假寐兮愍斯 假寐して斯れを愍い

王逸注 衣冠而寝、自憐傷也。不脱冠帶而臥曰假寐。『詩』云、假寐永歎。（衣冠して寝ね、自ら憐み傷むなり。冠帶を脱がずして臥するを假寐と曰う。『詩』[小雅・小弁]に云う、「假寐して永歎す」と）。

6 誰可與兮寤語 誰か与に寤語せんや

王逸注 衆人愚闇、誰與謀也。（衆人愚闇にして、誰か与に謀らんや。）

通釈 うたた寝していてもこのことを憐れむばかり、目覚めてもだれと一緒にこのことを語り合えるだろうか。

假寐 衣服や冠を脱がずにうたた寝すること。『詩経』小雅・「小弁」に「假寐永歎、維憂用老」とある。

愍 賢人君子が行き場を失っていることを憂うこと。『左伝』昭公元年に「吾代二子愍矣」とあり、孔穎達疏に「服虔曰、愍、憂也」とある。また楚辞「九章」惜誦に「惜誦以致愍兮、發憤以抒情」とあり、姜亮夫『屈原賦校注』（人民文学出版社、1957年）は「愍、憂也」とする。

誰可與…… だれと一緒に～するだろうか、を表す反語表現。楚辞「遠遊」に「誰可與玩斯遺芳兮、長向風而抒情」、「哀時命」に「廓落寂而無友兮、誰可與玩此遺芳」と見える定型表現である。「九懷」昭世にも「歷九州兮求合、誰可與兮終生」とある。

寤語 『今注』は『詩経』陳風「東門之池」の「晤語」（「彼美淑姬、可與晤語」、毛伝：晤、對也）であるとするが、「假寐」と対比で用いられていることより、目覚めてから語るの意であろう。西晋・陸機「應嘉賦」（『藝文類聚』卷三六・人部・隱逸）に「抱玄景以獨寐、含芳風而寤語」とある。

7 痛鳳兮遠逝 痛鳳は遠く逝き

王逸注 仁智之士、遁世去也。（仁智の士、世を遁れて去るなり。）

8 畜鳩兮近處 畜鳩は近くに処す

王逸注 畜養佞諛、而親附也。（佞諛を畜養して親附するなり。）

通釈 痛みをかかえた鳳凰は遠くへ飛び去り、家畜のうずらは近くにいる。

痛鳳 傷つき傷みを抱えた鳳。王逸が「仁智之士」と解釈するように、不遇の士を象徴する。この聯に関連する表現として、楚辞「九章」涉江・乱辞に「鸞皇鳳皇日以遠兮、燕雀烏鵲巢堂壇兮」、「七諫」乱辞に「鸞皇孔鳳日以遠兮、畜鳧駕鵝」とある。

遠逝 遠く旅立つこと。楚辞「離騷」に「日勉遠逝而無狐疑兮、孰求美而釋女」、さらに「何離心

之可同兮、吾將遠逝以自疏」とあり、また「七諫」怨世に「意有所載而遠逝兮、固非衆人之所識」とある。

鷓 小鳥の名。みふうずら。「鷓」に同じい。王逸が「佞諛」と注するように、小人を象徴する。楚辞「九思」疾世に「鷓雀列兮譁讟、鷓鴣鳴兮聒余」、王逸注に「鷓雀、小鳥、以喻小人列位也」とある。

9 鯨鰓兮幽潛 鯨鰓は幽く潜み

王逸注 大賢隱匿、竄林藪也。（大賢は隱匿し、林藪に竄るるなり。）

10 從蝦兮遊渚 從蝦は渚に遊ぶ

王逸注 小人並進、在朝廷也。鯨鰓、大魚也。蝦、小魚也。（小人は並びて進み、朝廷に在るなり。鯨鰓は、大魚なり。蝦は、小魚なり。）

通釈 大魚は深く沈み、小魚は渚に戯れる。

押韻 魚部上声（戸・者・覩・語・處・渚）。

鯨鰓 くじらやチョウザメといった大魚の類い。賢人を象徴する。

幽潛 海中深く沈むこと。

從蝦 王逸注は「蝦」のみ小魚とするが、「鯨鰓」と対になるので、『読本』が指摘するように「從蝦」二字で小魚類を指すとするのが妥当であろう。賈誼「吊屈原文」（『漢書』卷四八・賈誼伝）にも「偃螭瀨以隱處兮、夫豈從蝦與蛭蝻（『史記』卷八四・屈原賈生列伝では「夫豈從螳與蛭蝻」に作る）」とある。前掲の「鷓」と同じく小人の意を寓する。

渚 「渚」に同じく、水中の小島。または水辺を指す。『爾雅』积水篇に「水中可居者曰洲、小洲曰渚」、その郭璞注に「渚、當爲渚」とある。また『国語』越語下に「故濱於東海之陂、鼃鼃魚鱉之與處、而蛙黽之與同渚」、その韋昭注に「水邊亦曰渚」とある。”

11 乘虬兮登陽 虬に乗りて陽に登り

王逸注 意欲駕龍而陞雲也。（意 龍に駕して雲に陞らんと欲するなり。）

12 載象兮上行 象に載りて上り行く

王逸注 遂騎神獸、用登天也。神象、白身赤頭、有翼能飛也。（遂に神獸に騎りて、用て天に登るなり。神象は、白身赤頭にして、翼有りて能く飛ぶなり。）

通釈 みずちの引く車に乗って太陽に登っていき、象牙の車に乗って天に上がって行く

乘虬 「虬」は角のない龍。みずち。「乘虬」とはそのみずちに引かせた車に乗ること。楚辞「離

騷に「駟玉虬以乘鸞兮、溘埃風余上征」、「九章」涉江に「駕青虬兮驂白螭、吾與重華遊兮瑤之圃」（「虬」は「虯」の俗字）とある。

登陽 『今注』は『淮南子』天文訓に「清陽者薄靡而爲天、重濁者凝滯而爲地」とあるのに基づいて高い天上へと登っていく意とする。

載象 「象」について王逸注は「神象」とするが、楚辞「離騷」に「爲余駕飛龍兮、雜瑤象以爲車」とあることより、象牙で作られた豪華な車をいうのではないか。これは「惜誓」に「飛朱鳥使先驅兮、駕太一之象輿」とある「象輿」や、「郊祀歌」十九章・其十八「象載瑜」に「象載瑜、白集西、食甘露、飲榮泉（『漢書』顏師古注：象載、象輿也。山出象輿、瑞應車也。）」とある「象載」と同じものであろうと。

13 朝發兮蔥嶺 朝に蔥嶺を發し

王逸注 旦發西極之高山也。（旦に西極の高山を發するなり。）

14 夕至兮明光 夕べに明光に至る

王逸注 暮宿東極之丹巒也。（暮れに東極の丹巒に宿るなり。）

通釈 朝に蔥嶺から出發し、夕方に明光に到着する。

朝發……、夕至…… 遠行を示す楚辞作品の慣用表現。楚辞「離騷」に「朝發軔於蒼梧兮、夕余至乎縣圃」、「朝發軔於天津兮、夕余至乎西極」。

蔥嶺 パミール高原。楚辞作品では初出となる。「九懷」思忠にも「駕玄螭兮北征、躡吾路兮蔥嶺」と見える。

明光 神仙の集う、夜となく昼となく明るい土地。楚辞「遠遊」に「仍羽人於丹丘兮、留不死之舊郷」、その王逸注に「因就眾仙於明光也、丹丘晝夜常明也。「九懷」曰、夕宿乎明光、明光即丹丘也」とある。

15 北飲兮飛泉 北のかた飛泉を飲み

王逸注 吮嗽天液之浮源也。（天液の浮源に吮嗽するなり。）

16 南采兮芝英 南のかた芝英を采る

王逸注 咀嚼靈草、以延年也。（靈草を咀嚼して、以て年を延ばすなり。）

通釈 北の飛泉で水を飲み、南方で芝英を取る。

飛泉 崑崙にあるとされる谷。司馬相如「大人賦」（『漢書』卷五七下・司馬相如伝下）に「互折窈窕以右轉兮、橫厲飛泉以正東」、顏師古注に「張揖曰：飛泉、飛谷也。在崑崙西南」とある。ま

た楚辞「遠遊」に「吸飛泉之微液兮、懷琬琰之華英」とある。

芝英 伝説中の瑞草の名。一説に靈芝の花。楚辞「哀時命」に「願至崑崙之懸圃兮、采鍾山之玉英」、司馬相如「大人賦」（『漢書』卷五七下・司馬相如伝下）に「呼吸沆瀣兮餐朝霞、咀譙芝英兮嚼瓊華」とある。

17 宣遊兮列宿 宣く列宿に遊び

王逸注 遍歴六合、視衆星也。（六合を遍歴し、衆星を視るなり。）

18 順極兮彷徨 極に順いて彷徨す

王逸注 周繞北辰、觀天庭也。（北辰を周繞し、天庭を觀るなり。）

通釈 あまたの星々を隈無く渡り、北極星をめぐるながらさまよい歩く。

宣遊 あまねく巡遊すること。後漢・張衡「思玄賦」（『文選』卷十五）に「逼區中之隘陋兮、將北而宣遊」、劉良注に「宣、徧也」とある。また劉宋・顏延之「車駕幸京口侍遊蒜山作」詩（『文選』卷二二）に「宣遊弘下濟、窮遠凝聖情」。

列宿 居並ぶ星々。『史記』卷二七・天官書に「天則有列宿、地則有州域」。楚辞「九章」惜往日に「情冤見之日明兮、如列宿之錯置」。

順極 王逸注に拠れば「北辰」即ち北極星をめぐること。楚辞「九歎」遠逝に「引日月以指極兮、少須臾而釋思」とあり、王逸注に「極、謂北辰星也」とある。

彷徨 さまよい歩くこと。「徬徨」・「仿佯」に同じ。『史記』卷一〇六・吳王濞列伝に「故吳王欲內以晁錯爲討、處隨大王後車、彷徨天下」とあり、『文選』卷三三所引「招魂」に「彷徨無所倚、廣大無所極些」、張銑注に「彷徨、遊行貌」とある。

19 紅采兮駢衣 紅采の駢衣

王逸注 娑娑五采、芬華英也。（五采を娑娑とし、華英を芬とするなり。）

20 翠縹兮爲裳 翠縹もて裳と為す

王逸注 衣色瓌璋、耀青蔥也。（衣色瓌璋として、青蔥を耀かすなり。）

通釈 あざやかな赤の上着と青白い布地の裳とを身につける。

駢衣 あざやかな赤い上着。『補注』に「駢、思營切、赤色」とある。また『詩経』魯頌「駟」に「有駢有騏」、毛伝に「赤黄曰駢」、その正義に「駢爲純赤色。言赤黄者、謂赤而微黄、其色鮮明者也」とある。

翠縹 青白の織物。『補注』に「縹、疋沼切、帛青白色」とある。この聯の措辞は、楚辞「離騷」

の「製芰荷以爲衣兮、集芙蓉以爲裳」に基づく。

21 舒佩兮綝纒 佩を舒ぶること綝纒として

王逸注 緩帶徐歩、五玉鳴也。（帯を緩め徐かに歩き、五玉鳴るなり。）

22 竦余劍兮干將 余が劍干將を竦る

王逸注 握我寶劍、立延頸也。（我が宝劍を握り、立ちて頸を延ばすなり。）

通釈 ぶらさげた佩び玉は美しく、心地よい音を立て、我が劍である干將を手にする。

舒佩 おびものをゆるめる。リラックスした様子を示す。後漢・蔡邕「**積誨**」（『後漢書』卷五十下）に「當其無事也、則舒紳緩佩、鳴玉以歩、綽有餘裕」とある。

綝纒 おびものが多く垂れ下がるさまを示す双声の語。後漢・張衡「**思玄賦**」（『文選』卷十五）に「冠罽罽其映蓋兮、珮綝纒以輝煌」、薛綜注に「**綝纒**、盛貌」。

竦余劍 「竦」は手に持つ。楚辞「九歌」少司命に「**竦長劍兮擁幼艾**、蓀獨宜兮爲民正」、王逸注に「**竦**、執也」とある。

干將 春秋時代、呉国の人が作った名劍の名。莫邪と雌雄一対となる。『戦国策』齊策五に「今雖干將莫邪、非得人力、則不能割闕矣」とあり、楚辞「九歎」怨思に「**執棠谿以荆蓬兮、秉干將以割肉**」とある。

23 騰蛇兮後從 騰蛇 後に従い

王逸注 神虺侍從、慕仁賢也。（神虺侍従し、仁賢を慕うなり。）

24 飛駟兮步旁 飛駟 旁らを歩む

王逸注 駟馳奮飛、承轂輪也。（駟馳奮飛し、轂輪を承くるなり。）

通釈 飛び上がる蛇は後ろにつきしたが、天翔る駟が脇について歩む。

騰蛇 跳ね上がる蛇。天上遊行描写を修辭する先例としては、『韓非子』十過篇に「昔者黃帝合鬼神於泰山之上、駕象車而六蛟龍、……**騰蛇**伏地、鳳皇覆上」とある。

飛駟 飛び上がる駟。「駟」は牡馬とめすらばを掛け合わせたものという。王逸注が釈するように「**駟馳**」に同じ。枚乘「七發」（『文選』卷三四）に「鍾岱之牡、齒至之車、前似飛鳥、後類駟虛」とある。

25 微觀兮玄圃 微かに玄圃を觀

王逸注 上睨帝圃、見天園也。（上りて帝圃を睨み、天園を見るなり。）

26 覽察兮瑤光 瑤光を覽察す

王逸注 觀視斗柄與玉衡也。（斗柄と玉衡とを觀視するなり。）

通釈 わずかに玄圃を目にし、北斗七星の中の瑤光星をじっとみる。

玄圃 崑崙山にある仙人の居処。「懸圃」に同じ。楚辞「天問」に「崑崙懸圃、其居安在」、王逸注に「崑崙、山名也。其巔曰懸圃、乃上通於天也。相傳崑崙山頂、有金臺五所、玉樓十二、爲神仙所居」とある。また楚辞「離騷」に「朝發軔於蒼梧兮、夕余至乎懸圃」、後漢・張衡「東京賦」（『文選』卷三）に「左瞰陽谷、右睨玄圃」とある。

覽察 くわしく觀察すること。上句の「微觀」との対照が意識されているだろう。楚辞「離騷」に「覽察草木其猶未得兮、豈理美之能當」とある。

瑤光 北斗七星の第七星。『淮南子』本經訓に「瑤光者、資糧萬物者也」、その高誘注に「瑤光、謂北斗杓第七星也……一説、瑤光、和氣之見者也」。また後漢・張衡「西京賦」に「上飛闔而遠眺、正睹瑤光與玉繩」とある。

27 啓匱兮探筭 匱を啓きて筭を探るに

王逸注 發匣引籌、考祿相也。（匣を発いて籌を引き、祿相を考ずるなり。）

28 悲命兮相當 命の相い当たるを悲しむ

王逸注 不獲富貴、值流放也。（富貴を得ず、流放せらるるに値たるなり。）

通釈 箱を開いてめどきを探り、放逐される運命に当たっていたことを悲しむ。

押韻 陽部平声（陽・行・光・英・佯・裳・將・旁・光・當）。

啓匱 占いの箱を開くこと。類似する表現としては、『尚書』金縢篇に、病身の武王の身代わりを誓う「冊」書を「金縢之匱中」に入れておき、成王の時代にそれを開いて読む（「啓金縢之書」）場面が挙げられる。

探筭 「筭」は占いに使用する筭竹。『礼記』曲礼上篇に「龜爲卜、筭爲筮」とある。

相當 「相」字は、『補注』に「相、一作所」とあり、それに依拠して『校補』を始めとして「所當」に改めるべき、とする意見が多い。ただここでは「相」は動詞に添える軽い副詞として読むこともできるので、しばらく底本のままとする。「當」は「値」に同じ。不遇なる運命に当たること。後漢・宋子侯「董嬌饒詩」（『玉台新詠』卷一）に「花花自相對、葉葉自相當」とある。

29 紉蕙兮永辭 蕙を紉ぎて永く辞し

王逸注 結草爲誓、長訣行也。（草を結んで誓いを為し、長く訣行するなり。）

30 將離兮所思 將に思う所を離れんとす

王逸注 背去九族、遠懷王也。(九族に背き去り、懷王を遠ざくるなり。)

通釈 香り草をつないで永遠の別れを告げ、思いをよせていたところから離れようとする。

紉蕙 香草をおびものとして身につけること。楚辞「離騷」に「雜申椒與菌桂兮、豈維紉夫蕙茝…
…矯菌桂以紉蕙兮、索胡繩之纚纚」とある。

永辭 永久の別れを告げる。楚辞「九懷」陶壅にも「濟江海兮蟬蛻、絕北梁兮永辭」とある。**所思** 思い慕う人。楚辞「九歌」山鬼に「被石蘭兮帶杜衡、折芳馨兮遺所思」、古楽府「有所思」(『樂府詩集』卷十六)に「有所思、乃在大海南」とある。

31 浮雲兮容與 浮雲 容与たり

王逸注 天氣滃溶、乍東西也。(天氣滃溶として、乍ら東西するなり。)

32 道余兮何之 余を道びきて何くに之かん

王逸注 來迎導我、難隨從也。(来たりて我を迎え導くも、随従し難きなり。)

通釈 ゆったりとあてどなく浮かぶ雲よ、私をどこにみちびくのか。

押韻 之部平声(辭・思・之)。

浮雲 あてどなくさまよい浮かぶ雲。楚辞作品に頻出するが、楚辞「九章」悲回風に「眇遠志之所及兮、憐浮雲之相羊」とあるのが近い用例であろう。その王逸注に「相羊、無所據依之貌也。言己放棄、若浮雲之氣、東西無所據依也」とある。

容與 ゆったりとしたさまを表す双声の語。これも楚辞作品に常套の語である。「九歌」湘君に「崑不可兮再得、聊逍遙兮容與」、湘夫人に「時不可兮驟得、聊逍遙兮容與」とある。ただし雲の様子をこの語で形容する前例は見いだしがたい。

道余 「道」は「導」に同じ。私を先導して、の意。楚辞「離騷」に「乘騏驎以馳騁兮、來吾道夫先路」とあり、「道夫先路」について、『補注』は『文選』(卷三二)所収の「離騷」では「導夫先路」に作り、五臣注(呂向注)に「導引入先王之道路」とあることを指摘する。

何之 どこに向かうのか、の意。李陵「与蘇武」詩三首(『文選』卷二九)其三に「攜手上河梁、游子暮何之」とある。

33 遠望兮仞眠 遠く望むに仞眠として

王逸注 遙視楚國、闇未明也。(遙かに楚国を視るも、闇にして未だ明らかならざるなり。)

34 聞雷兮闐闐 雷の闐闐たるを聞く

王逸注 君好妄怒、威武盛也。(君好んで妄りに怒り、威武盛くなるなり。)

通釈 遠くを眺めるとぼんやりとして見えず、ごろごろと雷の鳴る音だけが耳に入る。

仟眠 視界がはっきりしないさまを表す疊韻の語。『補注』に「一作芋瞑」とある。後漢・張衡「南都賦」(『文選』巻四)「攢立叢駢、青冥^仟眠」の「仟眠」も同種の語であり、その李善注に「言林木攢羅、衆色幽昧也。楚辭曰、遠望兮芋眠。王逸曰、芋眠遙視、闇未明也。芋眠與仟眠音義同」とある。

闐闐 雷鳴の洪大さを形容する疊語。楚辞「九弁」に「屬雷師之闐闐兮、通飛廉之衙衙」とある。

35 陰憂兮感余 陰憂 余を感じしめ

王逸注 内愁鬱伊、害我性也。(内の愁い鬱伊として、我が性を害するなり。)

36 惆悵兮自怜 惆悵として自ら^{あわれ}怜む

王逸注 悵然失志、嗟厥命也。(悵然として志を失し、厥の命を嗟くなり。)

通釈 心中の憂鬱な気分が私を感じ入らせ、失意に浸り自らを憐れむ。

押韻 真部平声(眠・闐・怜)。

陰憂 心の内に生じる憂い。先例が見られない語である。

惆悵 恨み嘆くこと、また恨み嘆くさまを表す双声の語。楚辞「九弁」に「春秋遑遑而日高兮、然惆悵而自悲」とある。

自怜 自己憐憫にひたること。「怜」は「憐」に同じ。楚辞「九弁」に「私自憐兮何極、心怛怛兮諒直」とある。

「危俊」

題解 諸家概ね、世に入れられず危機に陥った英俊、の意とする。その内容の梗概を記せば、現世に拒絶された主人公が春の「嘉月」に車馬を駆り立て天上遊行を行う。その中で香草で身繕いをしたり、泰山や天上に赴き、牽牛星、太一星、「列孛」などの星宿を目にして楽しむ。また「鉅寶」などの瑞獣とも遭遇する。しかし彼と歩みをとものにすべき「匹儔」は探し当てられず、最後は悲嘆にくれたところで作品は閉じる。

1 林不容兮鳴蜩 林は鳴蜩を容れず

王逸注 國不養民、賢宜退也。(国は民を養わざれば、賢宜しく退くべきなり。)

2 余何留兮中州 余 何ぞ中州に留まらん

王逸注 我去諸夏、將遠逝也。（我諸夏を去り、將に遠逝せんとするなり。）

通釈 林はうるさく鳴く蟬を入れようとしな。そんな蟬のような私はどうしてこの林のような中国に留まれようか。

鳴蜩 さんざめく蟬。『詩經』豳風「七月」に「四季秀萋、五月鳴蜩」、小雅・小弁に「菀彼柳斯、鳴蜩嘒嘒」とある。セミは楚辞では、「九弁」に「燕翩翩其辭歸兮、蟬寂漠而無聲」、また「招隱士」に「歲暮兮不自聊、蟋蟀鳴兮啾啾」とあるように、秋の代名詞として用いられているが、ここでは不遇の士人を寓意するものとして形象化されている。この点については川合康三「蟬の詩に見る詩の轉變」（『中国のアルバ』所収、2003年。初出は『中国文学報』五七、1998年）125～127頁を参照。

余何留 どうしてこの場所にとどまっていられようか、の意。この部分の依拠する表現としては、楚辞「九歌」湘君に「君不行兮夷猶、蹇誰留兮中洲」とあるものが挙げられる。

中州 中国、すなわち地上世界。司馬相如「大人賦」（『漢書』卷五四下）に「世有大人兮、在乎中州」その顔師古注に「中州、中國也」とある。

3 陶嘉月兮總駕 嘉月^{よろこ}を陶びて駕を総べ

王逸注 嘉及吉時、驅乘駟也。（吉時に及ぶを嘉し、乘駟を驅るなり。）

4 攀玉英兮自脩 玉英を攀りて自ら修む

王逸注 采取瓊華、自脩飾也。（瓊華を採取して、自ら修飾するなり。）

通釈 春のめでたい月日が心地よいので馬を仕立て、玉のような花を手にし自らを飾り付ける。

陶嘉月 「陶」は喜ぶの意。『爾雅』釈詁下に「鬱、陶、繇、喜也」とある。「嘉月」は喜ばしい月。蔡邕「女賦」（『藝文類聚』卷三十・人部・怨）に「當三春之嘉月、時將歸於所天」、また劉宋・謝惠連「西陵遇風獻康樂」詩（『文選』卷二五）に「成裝候良辰、漾舟陶嘉月」とある。

總駕 王逸注「驅乘駟也」より、馬車を統御して走らせることをいう。劉宋・謝靈運「君子有所思行」（『樂府詩集』卷六一）に「總駕越鍾陵、還顧望京畿」とある。

攀玉英 「攀」は「採」と同じく、草花を摘み取ること。楚辞「九歌」湘君に「採薜荔兮水中、攀芙蓉兮木末」。「玉英」は宝玉のすぐれたもの、もしくは玉のような花。楚辞「九章」涉江に「登崑崙兮食玉英」とある。

自脩 『礼記』大学篇に「如琢如磨者、自脩也」とある「自脩」は道徳的な自己修養をいう語であるが、ここでは自らの身なりを整えるの意で用いる。

5 結榮菑兮透逝 榮菑を結びて透逝し

王逸注 束草陳信、遂奔邁也。（草を束ねて信を陳べ、遂に奔邁するなり。）

6 將去烝兮遠遊 將に烝を去りて遠く遊ばんとす

王逸注 遠離於君、之四裔也。『爾雅』曰、林・烝、君也。或曰、烝、進也。言去日進而遠也。

（君に遠離して、四裔に之くなり。『爾雅』に曰く、林・烝は、君なり、と。或いは曰く、烝は、進むるなり、と。言うところは去る日進めて遠ざかるなり。）

通釈 よろい草の花を結びつけて遠く旅立ち、君主の元を去って遠く遊ぼう。

結榮菑 「榮菑」は、花とヨロイグサ、或いは繁茂するヨロイグサの意。「結」は、楚辞「離騷」

「豈維紉夫蕙菑」の「紉」と同じく、ヨロイグサのような香草を身に帯びることをいう。つまり

「結榮菑」は、「離騷」「攬木根以結菑兮、貫薜荔之落蕊」とある「結菑」に類する表現である。

透逝 『補注』に「透、一作遠」とあることより、『読本』・『今訳』は「遠逝」、すなわち遠く旅立つの意とする。『今注』は「透逝而去」、なりゆきにまかせて立ち去るの意とする。下句の

「遠遊」の換句的表現ともみなせるので、ひとまず「遠逝」の意で解釈しておく。いずれにせよ、この場からの離脱、出立を言うのであろう。

烝 君主の意。『爾雅』釈詁下に「林、烝、天、帝、皇、王、后、辟、公、侯、君也」。

遠遊 遠く遊行すること。楚辞「遠遊」に「悲時俗之近陋兮、願輕舉而遠遊」とある。

7 徑岱土兮魏闕 岱土の魏闕を徑て

王逸注 行出北荒、山高桀也。（行きて北荒に出づるに、山高桀たるなり。）

8 歷九曲兮牽牛 九曲の牽牛を歴たり

王逸注 過觀列宿、九天際也。（過ぎて列宿の九天の際を観るなり。）

通釈 泰山の大いなる門闕を通り過ぎて、九天の果ての牽牛星を通り過ぎる。

徑 通り過ぎること。『史記』卷一・高祖本紀に「高祖被酒、夜徑澤中、令一人行前」とあり、司

馬貞『史記索隱』に「按、『廣雅』云、徑、斜過也」とあり、司馬相如「天子遊獵賦（上林賦）」

（『史記』卷一一七・司馬相如列伝）に「徑乎桂林之中、過乎泱莽之野」とある。

岱土 泰山。『補注』に「岱、泰山也。注云北荒、疑「岱」本「代」字」とある。

魏闕 大いなる門闕。『左伝』閔公元年に「魏、大名也」、『淮南子』俶真訓に「是故身處江海之上、而神游魏闕之下」、その許慎注に「魏闕、王者門外闕也。所以縣教象之書於象魏也。巍巍高大、故曰魏闕」とある。

九曲 王逸注「九天際也」に従えば、「九天」の曲隅、すなわち天の果ての意であろう。

牽牛 銀河で織女星と対峙する星の名。『詩経』小雅「大東」に「睨彼牽牛、不以服箱」。

9 聊假日兮相羊 聊か日を假りて相伴し

王逸注 且徐遊戯、頽年歳也。（且く徐ろに遊戯し、年歳を須つなり。）

10 遺光耀兮周流 光耀を遺して周流す

王逸注 敷揚榮華、垂顯烈也。（榮華を敷揚し、顯烈を垂るるなり。）

通釈 しばらく太陽を借り延ばしのんきにすごしながらぶらぶら歩き、素速く光を後ろに残しながら巡り行く。

聊假日 しばらく日を借りてのんびり過ごすこと。楚辞「離騷」に「奏九歌而舞韶兮、聊假日以媮樂」、『補注』に「顔師古云、此言遭遇幽厄、中心愁悶、假延日月苟爲娛樂耳。今俗猶言借日度時」とある。

相羊 「相伴」・「相伴」と同じく、ぶらぶら歩くさまをいう疊韻の語。楚辞「離騷」に「折若木以拂日兮、聊逍遙以相羊」、「九弁」に「攬駢轡而下節兮、聊逍遙以相伴」とある。

遺光耀 光を後ろに残すような猛烈な速度で進むこと。司馬相如「天子遊獵賦（上林賦）」（『史記』卷一一七・司馬相如列伝）に「於是乎乘輿彌節裴回、……軼赤電、遺光耀」とある。

周流 各地を経巡ること。楚辞作品の天上遊行表現に頻出する。楚辞「離騷」に「覽相觀於四極兮、周流乎天余乃下。……及余飾之方壯兮、周流觀乎上下。……遭吾道夫崑崙兮、路脩遠以周流」、「遠遊」に「經營四荒兮、周流六漠」とある。

11 望太一兮淹息 太一を望みて淹息し

王逸注 觀天貴將止沈滯也。（天の貴きを觀て將に止まり沈滯せんとするなり。）

12 紆余轡兮自休 余が轡を紆めて自ら休む

王逸注 緩我馬勒、留寢寐也。（我が馬の勒を緩め、留まりて寢寐するなり。）

通釈 太一神を遠く望んで留まり休み、わが馬の勒を緩めてしばし休息する。

太一 天神の名。楚辞「九歌」の「東皇太一」に同じ。楚辞「惜誓」に「飛朱鳥使先驅兮、駕太一之象輿」、「郊祀歌」十九章・其十一「天馬歌」に「太一貢兮天馬下、沾赤汗兮沫流赭」、楚辞「九歎」遠逝に「北斗爲我折中兮、太一爲余聽之」とある。

淹息 留まり休息すること。他に用例を見ない語である。強いて言えば「淹留止息」を約めた語とも見なせよう。

紆余轡 「紆」は王注に従えば「緩」の意。手綱を緩めて馬の歩みを遅らせることをいう。楚辞「離騷」に「總余轡乎扶桑」とある「總余轡」や、「九歌」東君に「援余轡兮高馳翔」の「援余轡」、「遠遊」に「撰余轡而正策兮」とある「撰余轡」を踏まえた表現であろう。「九懷」昭世にも「志懷逝兮心憫慄、紆余轡兮躊躇」とある。

13 **晞白日兮皎皎** **晞**けて白日は**皎皎**として

王逸注 天精光明、而照察也。(天精光明にして、而して照察するなり。)

14 **彌遠路兮悠悠** **遠路**の**悠悠**たるを**彌**む

王逸注 周望八極、究地外也。(周く八極を望み、地の外を究むるなり。)

通釈 夜が明けて太陽は光輝いておおり、その中をどこまでも続く遠い道のりを極め尽くす。

晞 夜が明ける。『詩経』齊風「東方未明」に「東方未晞、顛倒裳衣」、毛伝に「晞、明之始升」とある。

白日 昼間の太陽。楚辞「九章」思美人に「開春發歲兮、白日出之悠悠。……命則處幽、吾將罷兮、願及白日之未暮」、「九弁」に「去白日之昭昭兮、襲長夜之悠悠」とある。

皎皎 光り輝く貌。楚辞「遠遊」に「時髣佛以遙見兮、精皎皎以往來」とある。

彌 王注に「究地外也」とあるのに拠って、極めるの意で解釈する。後漢・張衡「西京賦」に「榦末之伎、態不可彌」、薛綜注に「彌、猶極也。言變巧之多、不可極也」とある。

悠悠 遠く果てしないさま。『詩経』王風「黍離」に「悠悠蒼天、此何人哉」、毛伝に「悠悠、遠意」とある。

遠路 遠くまで続く道。『韓非子』大体篇に「心無結怨、口無煩言。故車馬不疲弊於遠路、旌旗不亂於大澤」、前漢・蘇武「詩四首」(『文選』卷二九)其四に「征夫懷遠路、遊子戀故郷」とある。

15 **顧列孛兮縹縹** **列孛**の**縹縹**たるを**顧**み

王逸注 邪視彗星、光瞥瞥也。(邪めに彗星を視て、光瞥瞥たるなり。)

16 **觀幽雲兮陳浮** **幽雲**の**陳浮**するを**觀**る

王逸注 山氣滃鬱、而羅列也。(山氣滃鬱として、而して羅列するなり。)

通釈 天空にふわりと居並ぶ彗星を振り返りみながら、並び浮かぶほの明るい雲をしげしげと眺める。

顧 前掲「九懷」通路「顧遊心兮鄙鄂」の「顧」に同じ。振り返り見ること。

列孛 天空に居並ぶ多くの彗星。『公羊伝』文公十四年に「孛者何、彗星也」。「列」は「列宿」、「列星」の「列」と同じく、星々が多く連なる様子を形容する。

縹縹 空中に軽く上がるさま。前漢・賈誼「弔屈原文」（『漢書』卷四八・賈誼伝）に「鳳縹縹其高逝兮（『史記』卷八四・屈原賈生列伝では「鳳漂漂其高逝兮」に作る）、夫固自引而遠去」、顔師古注に「縹縹、輕舉貌」とある。

幽雲 用例が無い語であるが、前句の「列孛」の光を受けて、やや明るくなった雲の意で解しておく。

陳浮 王逸注が「羅列」と釈することより、雲が並び浮かぶの意とする。

17 鉅寶遷兮砢礧 鉅宝遷りて砢礧たり

王逸注 太歳轉移、聲礧礧也。（太歳轉移し、声礧礧たるなり。）

18 雉咸雉兮相求 雉は咸雉きて相い求む

王逸注 飛鳥驚鳴、雌雄合也。（飛鳥驚き鳴きて、雌雄合するなり。）

通釈 「鉅寶」が天空を移ると石がぶつかるかのような音が上がり、キジたちはそれに応じて皆鳴き声をあげ相手を求める。

鉅寶 瑞獣の名。『今注』は『漢書』卷二五下・郊祀志下に記載される、秦の文公時に飛来した瑞獣である「陳寶」を指すとする。それを祀った「陳寶祠」の様子を下問された劉向は「及陳寶祠、自秦文公至今七百餘歳矣、漢興世世常來、光色赤黄、長四五丈、直祠而息、音聲砢礧、野雞皆雉」と答えている。

砢礧 石がぶつかり合うような大きな音をあげる様子を表す疊韻の語。前出の「陳寶」が飛来したさいの音声である「砢礧」の語に対応しよう。

雉雉 雉が鳴き叫ぶこと。『礼記』月令篇に「（季冬之月）雉雉雞乳」、鄭玄注に「雉、雉鳴也」とある。これも前掲した「陳寶」に関する『漢書』郊祀志の「野雞皆雉」に対応する。つまりこの聯は、この場が瑞兆が充満する異空間であることを印象づけようとするのであろう。

19 泱莽莽兮究志 泱莽莽として志を究むるも

王逸注 周望率土、遠廣大也。（率土を周く望めば、遠く広大なり。）

20 懼吾心兮憐憐 吾が心の憐憐たるを懼る

王逸注 惟我憂思、意愁毒也。（惟だ我 憂思し、意 愁毒するなり。）

通釈 広大な土地を渡って満足したものの、わが心中が憂いに沈むのが心配になる。

泱莽莽 広大なさまを表す疊韻の語。司馬相如「天子遊獵賦（上林賦）」（『史記』卷一一七・司馬相如列伝）に「徑乎桂林之中、過乎泱莽之野」とある。「泱莽」の語は「泱滂」とも作る。西晋・木華「海賦」（『文選』卷十二）に「泱滂滄寧」とあり、李善注に「泱滂、廣大也」とある。

究志 《Ch'u Tz'u》は“Over vast spaces flies my questing spirit（広大な空間を越えて探究心を飛ばす）”、『今注』は「終極其志」とするが、ひとまず天上遊行の欲望を十分満足させる、という意に解しておく。

憐憐 憂うるさまを表す疊語。『補注』に「憐、憂也。音憐」とある。

21 歩余馬兮飛柱 我が馬を飛柱に歩ませ

王逸注 徘徊神山、且休息也。（神山を徘徊し、且に休息せんとするなり。）

22 覽可與兮匹儔 与に匹儔すべきものを覽んとす

王逸注 歴觀群英、求妃合也。二人爲匹、四人爲儔。（群英を歴觀し、妃合を求むるなり。二人を匹と爲し、四人を儔と爲す。）

通釈 馬を飛柱山まで歩かせてから休ませ、ともに連れ立ってくれる者を眺めわたす。

歩余馬 馬を休息の場に進ませること。楚辞「離騷」に「歩余馬於蘭皋兮、馳椒丘且焉止息」とある。

飛柱 王逸注によれば神山の名。

匹儔 伴侶、もしくは同好の士をいう。魏・曹植「贈王粲」詩（『文選』卷二四）に「中有孤鴛鴦、哀鳴求匹儔」とある。

23 卒莫有兮織介 卒に織介も有る莫し

王逸注 衆皆邪佞、無忠直也。（衆皆邪佞にして、忠直無きなり。）

24 永余思兮怵怵 永く余れ思うこと 怵怵たり

王逸注 愁心長慮、憂無極也。（愁心長慮、憂い極まること無きなり。）

通釈 しかし結局少しもそのような者はおらず、ひどく愁い悩む気持ちは長らく続いている。

押韻 幽部平声（鯛・州・脩・游・牛・流・休・悠・浮・求・儔・儔・怵）。

織介 ほんのわずか、の意。『戦国策』齊策四に「孟嘗君爲相數十年、無織介之禍者、馮諼之計也」とある。

怵怵 憂うるさまをあらわす疊語。『補注』に「怵、憂貌。音由」とある。

永余思 自ら長く思い悩むこと。『荀子』正名篇に「詩曰、長夜漫兮、永思騫兮」、楚辞「七諫」

自悲に「居愁懃其誰告兮、獨永思而憂悲」、哀時命に「悵惘罔以永思兮、心紆軫而增傷。……廓抱景而獨倚兮、超永思乎故郷」とある。

「昭世」

題解 「明るき世」、あるいは「世を明るくする」の意。《Ch'u Tz'u》は“A Light on the World (世上の輝き) ”、『今訳』は「昭世、使時世清明的意思」とする。本作品も「危俊」同様、世の中の混濁を契機として天上に飛び去った主人公が、自らを着飾りつつ、天上にては雨の如き大量の流星を見たり、素女や王后などの奏でる音楽に耳を傾けたりして心を癒す。しかし最後は地上の屈曲した山々を目にし、王がかつての靈力を失ったことを悟って滂沱の涙を流す。

1 世溷兮冥昏[●] 世溷^{みだ}れて冥昏し

王逸注 時君闇蔽、臣貪佞也。（時君は闇蔽にして、臣は貪佞たるなり。）

2 違君兮歸真[●] 君を違^さりて真に帰す

王逸注 將去懷王、就仁賢也。（將に懷王を違りて、仁賢に就かんとするなり。）

通釈 世が乱れて先行きが暗く見えなくなっているので、君主の下を去って「真」なる世界へと帰って行く。

世溷 世情が乱れること。楚辞「離騷」に「世溷濁而不分兮」、「九章」涉江に、「世溷濁而莫余知兮」、「卜居」に「世溷濁而不清」とある「世溷濁」という常套句を約めたものとみなせよう。

冥昏 暗く見えないこと。『春秋繁露』立元神篇に「不見不聞、是謂冥昏」とある。

違君 君主のもとから立ち去ること。『礼記』表記篇に「子曰、事君三違而不出竟、則利祿也」となり、鄭玄注に「違、猶去也。利祿、言爲貪祿留也。臣以道去君、至於三而不遂去、是貪祿」とある。

歸真 「真」の境地に帰ること。この語は楚辞「卜居」に「寧超然高舉、以保真乎」、『淮南子』汜論訓に「全性保真、不以物累形」とみえる「保真」と同様、道家・神仙家の用語に由来するものかもしれない。「九懷」陶壅にも「道莫貴兮歸真、羨余術兮可夷」と見える。

3 乘龍兮偃蹇 龍に乗りて偃蹇たり

王逸注 驂駕神獸、拏紛紜也。（神獸に驂駕し、拏として紛紜たるなり。）

4 高回翔兮上臻[●] 高く回翔して上に臻^{いた}る

王逸注 行戲遨遊、遂至天也。（行き戯れて遨遊し、遂に天に至るなり。）

通釈 龍の牽く馬車に乗ってうねうねと上昇し、高く天翔けて上方に到達する。

乗龍 龍に牽かせた馬車に乗ること。あるいは龍に騎乗する、の意。楚辞「九歌」大司命に「乗龍兮鞞鞞、高駝兮冲天。」

偃蹇 高く舞い上がるを表す疊韻の語。楚辞「離騷」に「望瑤臺之偃蹇兮、見有娥之佚女」、王逸注に「偃蹇、高貌」とあるのを始めとして、楚辞作品内に頻見する語であるが、車輿が高くのぼる様子を描くことに用いられる先行例としては、「郊祀歌」十九章・其十五「五神相」に「靈輿位、偃蹇驤」（顔師古注に「神既畢饗、則嚴駕靈輿、引其侍從之位、偃蹇高驤也」）とあり、また司馬相如「大人賦」（『史記』卷一一七）に「駕應龍象輿之螭略透麗兮、駢赤螭青虯之幽蠕蜿蜒……踳躅輻輳、容以委麗兮、綢繆偃蹇、忱寢以梁倚」とある。

回翔 旋回しながら飛翔すること。楚辞「九歌」大司命に「君迴翔兮以下、踰空桑兮從女」とある。

臻 到達する。『詩経』邶風・泉水に「遄臻于衛」、毛伝に「臻、至」とある。

5 襲英衣兮緹蜃 英衣の緹蜃たるを襲ね

王逸注 重我絳袍、采色鮮也。（我が絳袍を重ねて、采色鮮かなり。）

6 披華裳兮芳芬 華裳の芳芬たるを披る

王逸注 徐曳文衣、動馨香也。『詩』曰、娑娑其下。（徐ろに文衣を曳き、馨香を動かすなり。『詩』[『詩経』陳風「東門之枌」]に曰く、娑娑たる其の下、と。）

通釈 色鮮やかな花びらの衣を重ね、香りあふれる華やかな裳を身につける。

押韻 真部平声（昏・真・臻・芬）。

襲 服を重ね着すること。『礼記』内則篇に「寒不敢襲」、鄭玄注に「襲謂重衣」とあり、後漢・張衡「思玄賦」（『文選』卷十五）に「襲溫蒸之黻衣兮、被禮義之繡裳」、薛綜注に「襲、衣也」とある。

英衣 「九懷」に初出の語。《Ch'u Tz'u》は“a flowered coat”、『今注』は「華麗的服飾」とするが、いずれにせよ、花の色があざやかな上着を言うのであろう。

緹蜃 服の彩りが鮮明な様子を言う。『後漢書』列伝卷三十八・應劭伝に「宋愚夫亦賣燕石、緹蜃十重」とあり、李賢注に「蜃音襲。緹、赤色繒也。楚詞曰、襲英衣兮緹蜃。謂鮮明之衣」とある。

披 「被」に同じ。まとう。はおろ。後漢・馮衍「顯志賦」（『後漢書』列伝十八下）に「披綺季之麗服兮、揚屈原之靈芬」とある。

芬芳 ふくよかに香るさま。楚辞「九章」惜往日に「妒佳冶之芬芳兮、嫫母姣而自好。」とある。「芬芳」の語を押韻の関係で転倒させたものであろう。

華裳 華やかなもすそ。「英衣」に対応して案出された語であろう。魏・曹植「七啓」（『文選』卷三四）に「揚羅袂、振華裳」とあり、魏・王粲「神女賦」（『藝文類聚』卷七九・靈異部・神）に「襲羅綺之黼衣、曳縹繡之華裳」とある。

7 登羊角兮扶輿 羊角に登ること扶輿として

王逸注 陸彼高山、徐顧睨也。（彼の高山に陸り、徐ろに顧睨するなり。）

8 浮雲漢兮自娛（→浮雲漢兮自娛） 雲漢に浮かびて自ら楽しむ

王逸注 乘雲歌吟而遊戯也。或曰、浮雲漢。漢、天河也。（雲に乗りて歌吟し、而して遊戯するなり。或いは曰く、雲漢に浮かぶ、と。漢は、天河なり。）

通釈 羊角状の風に乗ってくるくと登っていき、天の河に浮かんで一人楽しむ。

羊角 羊の角のように、うずを巻いて吹く風。『莊子』逍遙遊篇に「有鳥焉、其名爲鵬、背若泰山、翼若垂天之雲、搏扶搖、羊角而上者九萬里」とあり、成玄英疏に「旋風曲辰、猶如羊角」とある。

扶輿 前掲『莊子』逍遙遊篇「搏扶搖」の「扶搖」と同根の語であり、『今注』が「盤旋而上之貌」と解説するように、風が渦巻き上昇する様子を形容する。疊韻の語。

浮雲漢 王逸注に「或作浮雲漢」とあること、また『校補』が指摘するように、前句の「登羊角」との対偶関係にあると見なせること、後漢・張衡「思玄賦」（『文選』卷十五）に「乘天潢之泛泛兮、浮雲漢之湯湯」という類句があることより、底本の字を「浮雲漢」と改めたものに訓読をつけ、以下語釈を行う。「雲漢」は天の河。『詩經』大雅「棫樸」に「倬彼雲漢、爲章於天」、毛伝に「雲漢、天河也」とある。

自娛 自分を楽しませる、自ら楽しむこと。楚辞「離騷」に「和調度以自娛兮、聊浮游而求女」、
「九思」傷時に「欲靜居兮自娛、心愁感兮不能」とある。

9 握神精兮雍容 神精を握りて雍容たり

王逸注 握持神明、動容儀也。（神明を握持し、容儀を動かすなり。）

10 與神人兮相胥 神人と相い^{したが}胥う

王逸注 留待松喬、與伴儷也。（松喬を留待し、与に伴儷となるなり。）

通釈 精神をゆったりと制御し、神々と仲間となる。神人につきしたがう。

握神精 王逸注に「握持神明」とあることより、精神を把持する、心魂を制御することをいうのであろう。

雍容 威儀のおだやかなさまを表す疊韻の語。『史記』卷一一七・司馬相如列伝に「相如之臨邛、從車騎、雍容間雅甚都」とある。

神人 神仙のこと。『史記』卷十二・封禪書に「乃益發船、令言海中神山者數千人求蓬萊神人」とあり、揚雄「長楊賦」（『漢書』卷八七下・揚雄伝下）に「聽廟中之雍雍、受神人之福祐」とある。

與…相胥 …につきしたがう、の意。『管子』枢言篇に「人進亦進、人退亦退、人勞亦勞、人佚亦佚、進退勞佚、與人相胥」とあり、郭沫若『管子集校注』（『郭沫若全集・歴史篇第五卷』〔人民出版社、1984年〕所収）に「（清）牟庭（『雪泥書屋雜誌』卷三）云、胥字古音當讀曰從、故胥有從意。其訓曰皆、曰相、曰輔、曰助者、皆因相從爲義也。……尹（知章）注云、胥、視也。不如釋爲與人相從、其文義順序也」とあるのに拠る。この部分、楚辞「哀時命」に「與赤松而結友兮、比王喬而爲耦」、「七諫」哀命に「從水蛟而爲徒兮、與神龍乎休息」と同様の、神仙らと交流を結ぶモチーフであろう。

11 流星墜兮成雨 流星墜ちて雨と成り

王逸注 陰精並降、如墮雨也。（陰精並べて降ること、墮雨の如きなり。）

12 進隣盼兮上丘墟。 (→集隣盼兮丘墟) 丘墟に集まること隣盼たり

王逸注 天且欲明、至山溪也。（天且けて明らかならんと欲し、山溪に至るなり。）

通釈 流星が墜ちて雨となり、丘の上に集まってきらきらと輝いている。

流星 流れ星。楚辞「九弁」に「願寄言夫流星兮、羌儻忽而難當」、「九思」遭危に「逢流星兮問路、顧我指兮從左」とある。

成雨 流星が雨のように大量に降りそそぐこと。『晏子春秋』雜下篇に「齊之臨淄三百閭、張袂成陰、揮汗成雨」とあるのは、往来する人の多さを「汗を揮えば雨と成る」と表現する。ここでは流星の多さを表現するのに用いる。この流星群らしきものを雨のようだとする表現は、『補注』が指摘するように、『春秋』の經文中に見ることができる。例えば『左伝』莊公七年の經文に「夏、四月辛卯、夜、恆星不見。夜中、星隕如雨」とある。

進隣盼 「進」字、及び下の「上」について、『補注』に「進、一作集」とあり、聞一多『校補』はそれに依拠して「案疑當作「集隣盼兮丘墟）」とする。諸家もこれに同意するものが多い。小稿もこの『校補』案に従い、底本の文字を改めたものに訓読をつけ、以下語釈を行う。「集」字は雨が大量に降るのに用いる。『孟子』離婁下篇に「七八月之間雨集」とあり、王褒「四子講徳論」に

「莫不風馳雨集」とある。「瞬盼」は光が鮮やかに輝くさまを表す疊韻の語。この字と揚雄「甘泉賦」（『漢書』卷八七上）に「壁馬犀之瞬渙」とある「瞬渙」（顔師古注所引『埤蒼』曰、瞬渙、文貌）、また魏・何晏の「景福殿賦」（『文選』卷十一）に「文彩瞬斑」とある「瞬斑」、そして後漢・張衡「西京賦」に「瑤珉瞬彬」とある「瞬彬」（薛綜注曰、瞬彬、玉光色雜也）とについて、『校補』は「字異義同」であるとし、「此承上文言流星如雨、墜于丘墟之上、其光瞬盼然也」と述べる。

上丘墟 「上」字について、『補注』に「古本無「上」字」とあり、『校補』は「“上”即“丘”之誤而衍」とする。「丘墟」は山陵、高台の地。『漢書』卷五七下・司馬相如伝下に「是時天子方好自擊熊豕、馳逐野獸、相如因上疏諫。其辭曰、……況乎涉豐草、騁丘墟」とあり、王褒「洞簫賦」（『文選』卷十七）に「原夫簫幹之所生兮、于江南之丘墟」とある。

13 覽舊邦兮滄鬱 旧邦の滄鬱たるを覽るに

王逸注 下見楚國之亂危也。（下に楚国の乱危なるを見るなり。）

14 余安能兮久居 余安くんぞ能く久しく居らん

王逸注 將背舊郷、之九夷也。（將に旧郷に背きて、九夷に之かんとするなり。）

通釈 かつての故国がもくもくとした雲に覆われているのを目にして、どうして彼の地に長くとどまっていられようか。

舊邦 楚辞「離騷」に「陟陸皇之赫戲兮、忽臨睨夫舊郷」とある「舊郷」に同じ。天上遊行しながらさらなる高みを目指そうとする時、主人公が決まって故郷を振り返るモチーフがここでも繰り返されている。「舊邦」については、楚辞「九歎」逢紛に「聲哀哀而懷高丘兮、心愁愁而思舊邦」とある。

滄鬱 雲が沸き起こるさまを表す双声の語。『補注』に「滄鬱、雲氣起也」とある。また「九懷」蓄英にも「望谿兮滄鬱、熊羆兮咆哮」とある。

安能 どうして～できようか、という反語表現。楚辞「漁父」に「安能以身之察察、受物之汶汶者乎。……安能以皓皓之白、而蒙世俗之塵埃乎」とあり、「七諫」怨世に「寧爲江海之泥塗兮、安能久見此濁世」とある。

久居 長く身を置くこと。『史記』卷九十二淮陰侯列伝に、「吾亦欲東耳、安能鬱鬱久居此乎」とある。

15 志懷逝兮心惻慄 志 逝かんと懷いて心惻慄たり

王逸注 心中欲去、内傷悲也。（心中去らんと欲して、内に傷み悲しむなり。）

16 紆余轡兮躊躇 余が轡を^{ゆる}めて躊躇す

王逸注 緩我馬勒、而低徊也。（我が馬勒を緩め、低徊するなり。）

通釈 旅立ちたいとは思いながらも心は憂い傷み、わが手綱を緩めてたちもとおる。

憫慄 憂い悲しむさまを表す双声の語。『補注』に「憫慄、憂貌」とあり、漢武帝「傷李夫人賦」『漢書』卷九七上・外戚伝上・孝武李夫人）に「嫵妍太息、嘆稚子兮、憫慄不言、倚所持兮」、顔師古注に「憫慄、哀愴之意也」とある。

紆余轡 前掲「九懷」危俊に「紆余轡兮自休」とあるのと同じく、自らの馬の手綱をゆるめてその足取りを遅らせること。

躊躇 たちもとおる。決心が付かない様子を表す双声の語。楚辞「九弁」に「事蹇蹇而覬進兮、蹇淹留而躊躇」、「七諫」怨世に「驥躊躇於弊輦兮、遇孫陽而得代」とある。

17 聞素女兮微歌 素女の微歌するを聞き

王逸注 神仙謳吟、聲依違也。（神仙謳吟し、声は依違たるなり。）

18 聽王后兮吹竽 王後の竽を吹くを聴く

王逸注 伏妃作樂、百虫至也。（伏妃 樂を作して、百虫至るなり。）

通釈 素女のかすかな歌声が耳に入り、王妃の吹く竽の音色に耳をかたむける。

素女 黄帝時代の神女の名。『史記』卷二八・封禪書に「泰帝使素女鼓五十弦瑟、悲、帝禁不止、故破其瑟爲二十五弦」とある。また前漢・揚雄「太玄賦」（『古文苑』卷四）に「聽素女之清聲兮、觀宓妃之妙曲」、楚辞「九思」傷世に「使素女兮鼓簧、乘戈和兮謳謠」、そして後漢・張衡「思玄賦」（『文選』卷十五）に「素女撫絃而餘音兮、太容吟曰念哉」とあり、薛綜注に「高誘淮南子注曰、素女、黄帝時方術之女也」とある。

微歌 軽く柔らかな歌声をいうのであろう。《Ch'u Tz'u》は“softly singing”、『読本』は「輕歌」、『今訳』は「婉轉歌声」と訳している。また魏・嵇康「酒會詩」（『嵇中散集』〔四部叢刊本〕卷一）に「臨川獻清醕、微歌發皓齒」とある。

王后 王注は「伏妃」と釈するが、《Ch'u Tz'u》は下記の「竽」と関連が深い「笙」の製造にも関わるとされる「女媧」（『宋書』卷十九・樂志・笙）を指すとし、『今注』は伏羲氏の女で落水の女神となったされる「宓妃」（或いは「慮妃」。楚辞「離騷」に「吾令豐隆乘雲兮、求宓妃之所在」）であるとする。いずれにせよ「素女」と同じく天上の神女を指すことは動かないであろう。

吹竽 竽は管楽器で笙の類。それを演奏することをいう。「九歌」東君に「鳴鳶兮吹竽、思靈保兮賢姱」とある。

19 魂悽愴兮感哀 魂悽愴として哀しきを感じ

王逸注 精神惆悵、而思歸也。（精神は惆悵として、帰らんとするなり。）

20 腸回回兮盤紆 腸回回として盤紆たり

王逸注 意中毒悶、心紆屈也。（意中毒悶し、心 紆屈たるなり。）

通釈 魂は傷んで悲しきを覚え、腸はぐるぐると回って落ち着かない。

押韻 魚部平声（與・娛・胥・墟・居・踳・竽・紆）。

悽愴 悲しき傷むありさまを表す双声の語。『礼記』祭義篇に「霜露既降、君子履之、必有悽愴之心、非其寒之謂也」、楚辞「九弁」に「中潛側之悽愴兮、長太息而増歎」とある。

腸回回 心が混乱し安定しないさまを表す。宋玉「神女賦」（『文選』巻十九）に「徊腸傷氣、顛倒失據」、呂延濟注に「徊腸傷氣、惜離別也」とあり、司馬遷「報任少卿書」（『漢書』巻六二・司馬遷伝）に「是以腸一日而九回、居則忽忽若有所亡、出則不知所如往」とある。

盤紆 ぐるぐるとくねり曲がるさま。宋玉「高唐賦」（『文選』巻十九）に「水澹澹而盤紆兮、洪波淫淫之溶仁」、司馬相如「天子遊獵賦（子虚賦）」に「其山則盤紆峩鬱、隆崇嶺峯」とある。ここでは前句の「腸回回」同様心の不安定さを表す。

21 撫余佩兮續紛 余が佩の續紛たるを撫し

王逸注 持我玉帶、相糾結也。（我が玉帯を持して、相い糾結するなり。）

22 高太息兮自憐 高く太息して自ら憐れむ

王逸注 長歎傷己、遠放棄也。（長く歎きて己の、遠く放棄せらるるを傷む。）

通釈 盛んに飾り立てたおびものを撫でさすり、長くため息をついて自ら憐れむ。

撫 身につけたものを撫でさすること。楚辞「九歌」東皇太一に「撫長劍兮玉珥、璆璠鳴兮琳琅」とある。

續紛 おびものを盛んに飾り立てる様子を表す疊韻の語。楚辞「離騷」に「佩續紛其繁飾兮、芳菲菲其彌章」、王逸注に「續紛、盛貌」とあり、また後漢・班固「西都賦」（『後漢書』列伝巻三十上・班固伝上）に「紅羅颯纒、綺組續紛」とある。

太息 深くため息をつくこと。楚辞作品では「長太息」の語が多用される。「離騷」に「長太息以掩涕兮、哀民生之多艱」、「九歌」東君に「長太息兮將上、心低徊兮顧懷」、「遠遊」に「思舊故以想像兮、長太息而掩涕」などがある。

自憐 前掲「九懷」通路に「惆悵兮自憐」とあるのと同じく自らを憐れむこと。

23 使祝融兮先行 祝融をして先に行かしめ

王逸注 俾南方神開軌轍也。(南方の神をして軌轍を開かしむるなり。)

24 令昭明兮開門 昭明をして門を開かしむ

王逸注 炎神前驅、關梁發也。(炎神をして前驅せしめ、関梁もて発かしむるなり。)

通釈 南方の神祝融を先駆けとし、昭明星に天門を開かせる。

押韻 真部平声(紛・憐・門)。

祝融 南方の神。『管子』五行篇に「昔者黄帝……得祝融而辯於南方」とあり、楚辞「遠遊」に「祝融戒而蹕御兮、騰告鸞鳥迎宓妃」とある。

先行 前掲楚辞「遠遊」の「祝融戒而蹕御兮」の「蹕御」に同じく、先払いすること。

昭明 王逸注は前句に南方の神「祝融」が見えることから、「昭明」も同じく南方の神である「炎神」と釈したと思われるが、根拠に乏しい。『今注』は『史記』卷二七・天官書に「昭明星、大而白、無角、乍上乍下。所出國、起兵多變。」とあるのに拠り、星の名とする。しばらく今注にしたがう。

開門 楚辞「離騷」の「吾令帝閭開關兮、倚閭闔而望予」、また「遠遊」の「命天閭其開關兮、排闥闔而望予」の「開關」と同じく、天門を開かせることをいう。さらに「郊祀歌」十九章・其十「天馬」二首之二に「天馬來、開遠門」とある。

25 馳六蛟兮上征 六蛟を馳せて上征し

王逸注 乘龍直驅、陞閭闔也。(龍に乗りて直ちに駆け、閭闔に陞るなり。)

26 竦余駕兮入冥 余が駕を竦て冥に入る

王逸注 遂馳我車、上寥廓也。(遂に我が車を馳せ、寥廓に登るなり。)

通釈 六頭のみずちが牽く車を走らせて飛び上がり、駆り立てて幽冥へと入っていく。

馳六蛟 「六蛟」はみずち六頭に牽かせた車であり、それを走らせることをいう。『韓非子』十過篇に「昔者黄帝合鬼神於泰山之上、駕象車而六蛟龍、畢方並轄、蚩尤居前」とある。また類句として「九歎」遠遊に「馳六龍於三危兮、朝西靈於九濱」とある。

上征 前掲「九懷」匡機にも「乘日月兮上征」とある。「上征」の語釈を参照。

竦余駕 「竦」は上に高くかかげること、つまり自らの車を飛揚させることをいう。「郊祀歌」十九章・其十「天馬」二首之二に「竦予身、逝昆侖」とあり、後漢・張衡「思玄賦」(『文選』卷十五)に「竦余身而順止兮、遵繩墨而不跌」、薛綜注に「竦、立也」とある。

入冥 「冥」は「青冥」に同じく天をさす。要するに「入冥」とは天上世界に入り込むことをいう。楚辞「哀時命」に「浮雲霧而入冥兮、騎白鹿而容與」とある。

27 歴九州兮索合 九州を歴て合うものを索むるも

王逸注 周遍天下、求雙匹也。（天下を周遍し、双匹を求むるなり。）

28 誰可與兮終生 誰か与に生を終うべけんや

王逸注 莫足與友爲親密也。（与に友たりて親密と為るに足るもの莫きなり。）

通釈 世界を経巡って連れ合いを求めるが、誰と一緒に生涯をすごせようか。

歴九州 「九州」は中国全土のこと。楚辞「離騷」に「思九州之博大兮、豈惟是其有女」とある。また賈誼「弔屈原文」（『漢書』卷四八・賈誼伝）に「歴九州而相其君兮（『史記』卷八四・屈原賈生列伝では「臨九州而相君兮」に作る）、何必懷此都也」とある。

索合 王逸注が「求雙匹也」というように、志を同じくする同行者を捜求すること。『今注』は楚辞「離騷」に「湯禹嚴而求合兮、摯咎繇而能調」とある「求合」のことだとする。

誰可與…… 前掲「九懷」通路にも「假寐兮愍斯、誰可與兮寤語」と見える、楚辞作品に常套の反語表現。

終生 命が終わるまでの間。生涯。『漢書』卷六七・楊王孫伝に「且夫死者、終生之化、而物之歸者也」とある。阮籍「詠懷」詩八十二首（陳伯君校注『阮籍集校注』〔中華書局、1987年〕卷下）其三十六に「誰言萬事艱、逍遙可終生」とある。

29 忽反顧兮西園 忽ち反って西園を顧みて

王逸注 見彼隴蜀、道阻阨也。（彼の隴蜀を見るに、道阻阨なり。）

30 睹軫丘兮崎傾 軫丘の崎傾するを睹る

王逸注 山陵嶽岑、難涉歴也。（山陵嶽岑として、涉歴し難きなり。）

通釈 ふと振り返って西の園苑に目をやれば、屈曲の山が激しく傾くのが目に入る。

忽反顧 ふと振り返りみること。楚辞「離騷」に「忽反顧以遊目兮、將往觀乎四荒、……忽反顧以流涕兮、哀高丘之無女」とある。

西園 具体的にどの場所をさすのかは不明。王逸注は「隴蜀」と釈するが、『今注』はそれを否定し、後漢・張衡「東京賦」（『文選』卷二）に「大閱西園〔薛綜注曰、西園、上林苑〕」とある「西園」の語が示す「上林苑」ではないかとする。『疏證』も王逸の解釈を否定し「猶崑崙、西海」とする。楚辞作品の常套として、「忽臨睨夫舊郷」（「離騷」）とあるのように旅の終わりに

顧みられる「舊郷」のような地上であろう。ここでは強いて特定することを避け、「地上にある西の園苑の地」の意に留める。

軫丘 屈曲した険しい山丘。『補注』は楚辞「九章」抽思に「軫石崑崙、蹇吾願兮」とある「軫石」のこととする。

崎傾 王逸注に「崑崙」の語と同じく、山陵の激しく傾く様子を表す双声の語。劉宋・顔延之「拜陵廟作」詩（『文選』卷二三）に「發軌喪夷易、歸軫真崎傾」とある。

31 横垂涕兮泫流 横に涙を垂れて泫流し

王逸注 悲思念國、泣雙下也。（悲思念國、泣 双つながら下るなり。）

32 悲余后兮失靈 余が後の靈を失うを悲しむ

王逸注 哀惜我后、違天法也。（我が後の天法に違うを哀惜するなり。）

通釈 あふれるほど涙を垂れ流し、我が君が靈妙なる力を失ってしまったことを悲しむ。

押韻 耕部平声（征・冥・生・傾・靈）。

横垂涕 とめどなく涙を流すこと。楚辞「九歌」湘君に「横流涕兮潺湲、隱思君兮徘徊」とある。

泫流 多く涙を垂れること。後漢・馬融「長笛賦」（『文選』卷十八）に「泣血泫流、交横而下」とあり、西晋・潘岳「懷舊賦」（『文選』卷十六）に「歩庭廡以徘徊、涕泫流而霑巾」とある。”

余后 わが主君。『尚書』商書・仲虺之誥に「俎予后、后来其蘇」とあり、偽孔伝に「湯所往之民、皆喜曰、待我君來、其可蘇息」とある。

失靈 王逸は「違天法」と釈するが、楚辞「離騷」では主君は「靈脩」と呼ばれ、「傷靈脩之數化」とあるように、主人公は主君が本質的に変化してしまった状態を嘆いている。ここでも君主が元来あった靈妙なる力を変化させ、ついには無くしてしまう、と解しておく。